１．高齢者の冷房を使用する理由と設定室温―エアコンの使用に対する実態調査―、糸井川高穂、日本建築学会環境系論文集、第 734 号、pp377-383、2017

辻本は若いころから冷房が嫌いで（どうやら温度差アレルギー）、それがドライミスト開発の動機の一つである。実際、名古屋・東京の自宅では、ドライミストをベランダで利用して涼をとっている。その際の運転の判断基準は、就寝する居間の気温を 30℃以下にすること（実際、そうでないと裸でも眠りにつけない）である。
糸井川の論文は、正にこの判断基準が老人にとってのスタンダードであることを、60 歳以上の老人 227 名からのアンケート回答で示している。論文のまとめ「３．エアコンを使用すると判断する室温（約 29.6℃）はエアコン使用時の設定室温（約 26.5℃）より高い。」は老人がエアコンを起動させる温度が 30℃であること、エアコン以外の方法（ドライミスト）でこの温度以下にすることが出来れば、エアコン利用が抑制されることを示している。